

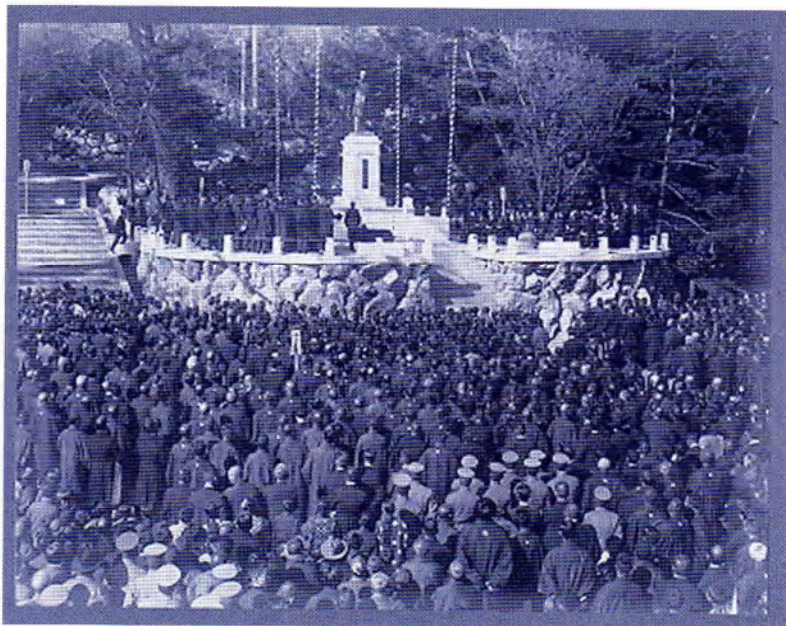
会報

板垣会

第3号



国会議事堂中央広間の板垣退助銅像
(昭和13年建立・北村西望製作)



高知公園の板垣退助銅像除幕式(大正12年12月5日。今井章博氏所蔵)



没後百年に向けてのご協力をお願い

特定非営利活動法人・板垣会理事長 古谷 俊夫

大正八年七月十六日、板垣退助先生は八十三歳で逝去しました。平成三十年には、没後百年を迎えます。

板垣会の歴史は、大正九年の「板垣伯銅像記念碑建設同志会」結成にさかのぼります。同会は、大正十二年十二月五日、高知公園に板垣退助退助銅像を建立して財団法人となりました。

昭和十八年二月、戦局悪化により伯の銅像は解体・供出され、「財団法人板垣伯銅像保存会」と改称していた建設同志会は、「銅像保管」の目的を失いました。このため、昭和二十年五月十日、高野寺境内に「板垣会館」を建築した「板垣会」と合併し、「財団法人板垣会」を創立することになります。しかし、事務所を置いた板垣会館は、同年七月四日の高知大空襲で灰燼に帰しました。

昭和二十二年十月十日、財団法人板垣会は戦時色を一掃し、板垣先生の遺徳を顕彰し、自由民権思想の拡充徹底、民主的文化的文化国家の実現に寄与することを目的に再出発しました。代々の役員は、野村茂久・馬岡村三省・里見義裕・橋詰延寿・寺尾豊・平尾道雄・吉村真二氏など、高知県の政財界・学術文化を代表する人々が名をつらね、平成二十五年には特定非営利活動法人に衣替えして今日に至っています。

二年後の板垣先生没後百年は、九十六年の長い歴史をもつ板垣会にとって大きな節目の年となります。板垣会は、近代日本の礎を築き、自由・平等・博愛の思想に生きた板垣先生の顕彰活動を二層強めて参りますので、会員の皆様の引き続きのご支援、ご協力をお願い申し上げます。

板垣退助の政党指導と河野広中



中京大学文学部准教授 中元 崇智

近代日本における政党、特に戦前期における政党党首(総裁)・現職の衆議院議員として内閣を組織したのは原敬、浜口雄幸、犬養毅の三名であり、政党党首の多くが貴族院議員(ないしは非議員)として政党を指導し、あるいは内閣を組織したことはよく知られている。もちろん、現在の議院内閣制と異なる大日本帝国憲法下において、首相に就任する条件として現職の衆議院議員であることは必要条件ではなかった。しかし、現職の衆議院議員であった原と浜口は共に立憲政友会と立憲民



図①・『自由』附録

政党を率いて強大なリーダーシップを發揮したとされる。その一方で、近代日本における多くの政党党首が衆議院ではなく、院外(貴族院含む)から政党を指揮する起源はいつ、どのように生まれたのであろうか。

それを考える際に重要な人物が、近代日本における政党の黎明期、自由党総理であった板垣退助である。板垣は明治十四年十月の自由党結成によつて総理に就任、自由党解党を経て、再び帝国議会開会後の明治二十四年三月の大阪大会で自由党総理に復帰した。しかし、その後の板垣は内務大臣に二度就任したのみであり、衆議院議員になつたこともなければ、伊藤博文や大隈重信のように、貴族院議長や貴族院議員になつた経歴もないのである。では、板垣は非議員の立場からどのように政党を指導したのであろうか。

それを考える手がかりとなるのが、図①の自由党機関誌『自由』附録である。図①は板垣退助(中央上)を中心とする河野広中(左

黨報

第拾七號

自由黨々報局

自由党党報

下)・松田正久(中央下)・星亨(右下)の自由党領袖たちの肖像画(『自由』明治二十六年二月二十一日号附録)である。当時、河野は自由党内総理、松田は自由党政務調査局主幹、星は衆議院議長であり、自由党最高幹部、領袖であった。既に、明治二十五年六月十八日、星、河野、松田が満場一致を以て「今後一層総理を佐^ナけて、党務整理、党勢拡張に尽力せられんことを囑託」されており(『自由党党報』一五号)、総理板垣の補佐役として星、河野、松田が党領袖として認知されつつあった。そして、この三人の中で板垣の党運営上、特に重要な人物が河野広中であった。

明治二十四年三月の大阪大会で板垣は自由党総理に復帰し、非議員の立場から党改革を推進した。板垣は総理を頂点とする国会議員中心の政党を掲げ、イギリス流の影の内閣Ⅱ 政務調査部が総理を補佐し、政策立案を行う体制を整備する一方、非議員である自ら

の衆議院内における代理として河野広中を院内総理（議場内総理）に指名した。第二議会が召集された翌日の明治二十四年十一月二十日には、「一 議院内に於ける我党の運動に就ては河野広中氏を以て総理代理となし其方面に当らしむる事、但河野氏事故ある時は松田正久氏をして代らしむる事」が自由党代議士総会で決定されている（『自由党党報』四号）。

つまり、第二議会では衆議院議員である河野広中が「総理の代理」として議院内における自由党の運動を指導する体制となり、この「総理の代理」が院内総理となったと考えられる。そして、それは院外から政党を指導する板垣の代理的存在として自由党大阪大会直後から構想されたものであった。

その後、河野広中は第三議会、第四議会、自由党院内総理として自由党衆議院議員を



河野広中

統率し、藩閥政府と激しく対峙した。特に、第四議会における河野院内総理は再び政府攻撃を主導し、明治二十六年二月二十三日、伊藤内閣弾劾上奏案が上程され、衆議院は停会となった。二月七日、河野が内閣弾劾上奏案の提出理由を説明し、上奏案が衆議院で賛成多数で可決されると、二月十日、明治天皇による和協の詔勅が発せられたのである。

図①が『自由』附録に掲載された明治二十六年二月二十一日は、第四議会で衆議院と藩閥政府が対峙し、明治天皇による「我協の詔勅」が出された十一日後であり、まさに初期議会期の政治史の分岐点であった。この時、板垣は「左れハ我党も涙を飲んで一步を譲り協和の実を挙げ以て鳳詔の聖旨に負かざる事を務めざるべからず」と述べた上で、衆議院が政府から行政改革により冗員、冗費を省くよう言質を取つて第五議会を待つよう衆議院議長星亨と院内総理河野広中に伝えていた（『福島民報』明治二十六年二月二十一日号）。

ここで、星と河野が登場している点に改めて注目したい。板垣は天皇の詔勅を受け入れ、政府との妥協に応じる際に、衆議院議長星と自由党院内総理の河野に指示を与えており、河野が院内自由党をまとめる院内総理としての役割を果たしていることが確認できる。

しかし、明治二十七年六月に総理を補佐する政務委員が設置され、板垣と政務委員（星・河野・松田・片岡健吉）による寡占的な指導体制が成立した。その結果、少数の党幹部による指導体制が成立し、院内総理も第六議会を最後に消滅したと考えられる。一方、板垣が当初総理を補佐する機関とした政務調査部は政策立案機関に特化して日清戦後も存続することとなった。

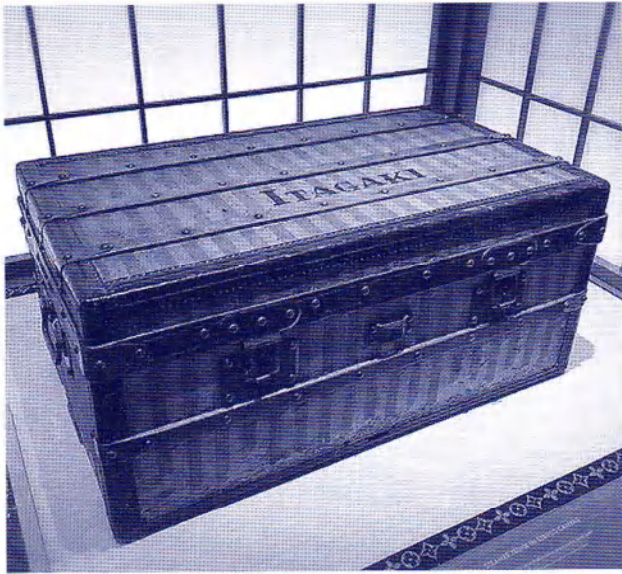
このように、板垣は自由党改革を推進する中で、非議員の政党党首が政党を指揮する体制を構築すべく試行錯誤を繰り返した。もちろん、衆議院議員が内閣総理大臣に就任する戦後の議院内閣制と戦前の内閣制は大きく異なるが、衆議院議員でない政党党首が党を指揮する構造の先駆的事例となったのが板垣といえよう。そして、板垣総理を支えたのが、議院内における「総理の代理」院内総理河野広中であり、少数の党幹部による指導体制＝政務委員制の成立によつて、院内総理から政務委員へと板垣を補佐して自由党を指導する体制も転換していったのである。

板垣退助とルイ・ヴィトン

板垣会副理事長 公文 豪

東京・紀尾井町の特設会場で四月二三日から開催された「VOLEZ,VOGUEZ,VO

YAGEZ—LOUIS VUITTON 空へ、海へ、彼方へ—旅するルイ・ヴィトン展」は、期間中の入場者約一九万人を記録。六月一日、大盛況のうちに幕を閉じた。ルイ・ヴィトン一六〇年の歴史が一〇のコーナーにわけられ、



それぞれにトランクやバックなどの名品がズラリと並んだ迫力は圧倒的なものであった。

なかでも注目を集めたのが、高知市立自由民権記念館から出展された小山家寄託・板垣退助のステイマー・トランクである。新聞、テレビ、雑誌がこぞ取り上げ、ネット上では「板垣トランク」として話題になった。展示に先立ち、パリ本店から派遣された2人の美術品修復士によって、東京で一週間かけて修復保全作業が行われた。傷んでいた外装のコーテッドキャンパスは見事に補修され、金属部も元の輝きを取り戻している。シリアルナンバー「7720」のペーパーラベルなど内装も補修された。

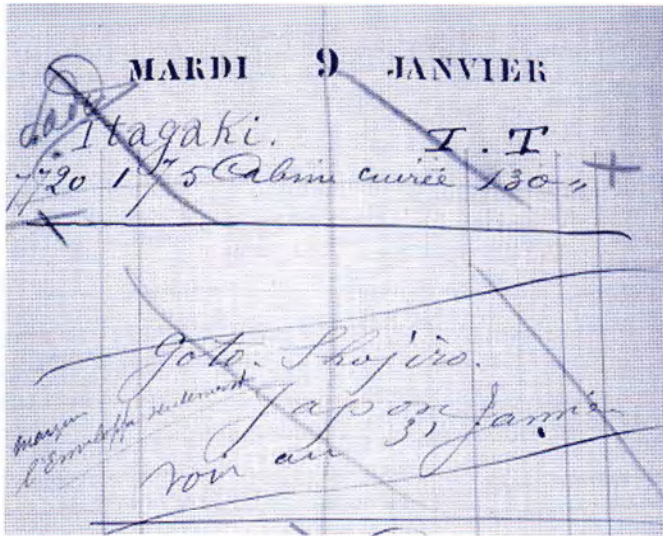
今回の展覧会にあたって、私は展示を担当したルイ・ヴィトン ジャパン(株)のFさんに、ルイ・ヴィトン本店が保存する膨大な顧客名簿の中から板垣退助のトランク購入記録を探しだし、この機会に複写でよいかから見せてほしいとお願いしてあった。展覧会開催の多忙

な中、パリ本店に連絡して購入記録を取り寄せるのは大変だったと思う。六月早々、私の手許にびつくりするほどお洒落なルイ・ヴィトンのネーム入りファイルが送られてきた。中には「店舗ノート」の一部、板垣退助と後藤象二郎のトランク購入記録のカラーコピーが入っていた。私はしばらく声を失った。いずれも、これまで日本人の誰も見た事のないパリ本社に残された板垣洋行に関わる超一級資料なのだ。

板垣の購入は1月9日

今年三月四日の『日本経済新聞』は、仏高級ブランド最大大手ルイ・ヴィトンの二〇一五年通期の売上高は前年比一六%増の三五六億六四〇〇万ユーロ、純利益は三五億七三〇〇万ユーロ(約四四〇〇億円)で二〇%の増益と報じている。

一五七年の歴史をもつパリのルイ・ヴィトン本店が、創業以来の顧客名簿をすべて残していることはよく知られている。ルイ・ヴィトン ジャパン初代社長・秦郷次郎氏(高知出身)は『私的ブランド論』(二〇〇六年、日本経済新聞社)の中で、パリ本店の顧客台帳に、「一八八三(明治一六年)一月三〇日、明治維新の元勳、坂本龍馬と同じ土佐出身の後藤象二郎が一〇センチメートルの大型トランクを



板垣退助の購入記録(1883年1月9日)



後藤象二郎の購入記録(1883年1月30日)

購入したことが記録」されていると紹介し、後藤の顧客カードの写真を載せた。このためか、ネット上では「日本人で最初にルイ・ヴィトンを購入したのは後藤象二郎」という話がまことしやかに広がった。ところがこれは大間違いで、Fさんの今回の調査で、板垣後藤よりも五年前、一八七五年に初の日本人購入者として駐仏公使をつとめた鮫島尚信(薩摩出身)の名が記録されていることが確認された。ただし、鮫島が購入したトランクは未発見なので、日本に残る最古のルイ・ヴィトン商品は板垣退助のトランクということになる。

板垣、後藤がパリに滞在した一八八三年は、

ルイ・ヴィトン創業から二四年目。本店はオペラ座とマドレーヌ寺院を結ぶスクリーブ街一番地にあった。同社は一八五九年、フランスのスーツケース職人ルイ・ヴィトンが、世界最初の旅行用鞆の専門店をパリに開業したことからはまった。一八六七年の万国博覧会で銅メダルを獲得して国際的に評価され、ロシア皇太子やスペイン国王、中東の王侯貴族から注文を受けるなど、ルイ・ヴィトンにとってこの時代は黎明期そのものだった。日本の家紋にヒントを得たとされる有名な「LV」の文字を組み合わせたモノグラムもまだ登場していない時代である。

今回みつけた店舗ノートによれば、板

垣が本店を訪ねてトランクを注文したのは一八八三年一月九日。パリ到着から、ほぼ二週間後である。ノートには、しつかりと「7720」のシリアルナンバーが記入されている。「Itagaki」「I.T」とあるのは、トランクの表と横にこのネームを刻印してほしいという注文を意味しているのだろう。これらは現存する板垣のトランクにあるものとぴたり一致する。

板垣が購入して三週間後の一月三〇日、今度は後藤がトランクを注文している。ただし、後藤本人がルイ・ヴィトン本店に足を運んだわけではない。後述のように、後藤は一月二二日にパリを出発してベルリンへ赴き、三月上旬に戻つて来るまでフランスにはいなかった。一月三〇日、後藤の代わりに誰が注文したのかは謎である。それはともかく、新たにみつかった店舗ノートで注目すべきは、後藤がシリアルナンバー「7908」「7705」のヌメ革製トランクを二つ購入していることである。ただし、これらの現物はみつかっていない。種々の事情があったため、私はもはや二つとも存在していないと見ている。

仏英の名士と交流

一八八二(明治一五)年一月一日、板垣と後藤、随員の栗原亮一・今村和郎の四人は、

仏国郵船ボルガ号に搭乗して横浜を旅立った。改進黨系新聞から洋行費出処疑惑を攻撃され、馬場辰猪、大石正巳、末広重恭ら自由党内の猛反対をも押し切つての洋行だった。

一行は、香港、サイゴン、シンガポール、コロンボ、アデンを経てスエズ運河を抜け、二二月二四日マルセイユ港に到着。二六日に汽車で同地を発し、リヨンを経て二二月二七日パリに着いた。

パリ、ロンドン滞在中の板垣の行動は、あまりよくわからない。時々、栗原亮一が自由新聞社に寄こした手紙や、在仏外交官・井田讓、駐英公使・森有礼らが板垣の動向を報告した伊藤博文宛の書簡などで知れる程度である。

板垣が是非会いたいと思つていたガンベッタは、パリ到着直後の一八八三年一月一日に逝去した。しかし、その後継者クレマンソーとは親しく交わり、時の大統領グレゴワールの夜会にも招待された。碩学アコラスを訪問して学説を聞くかたわら、フランスの制度、民情を探り、軍人出身らしくワテローの戦跡を見学にかけたつもりもした。

特筆すべきは、文豪ビクトル・ユーゴーと会見たことである。かの有名な『レ・ミゼラブル』の著者は、すでに八〇歳を超えた白髪の老人であった。ユーゴーは板垣が岐阜で刺客の難に遭つたことを知っており、自由主義のため「進

め、進め、退くことなかれ」と励ました。そして、人民の覚醒、興起には、欧米自由主義の政論、歴史小説を新聞紙上に続々掲載することが急務だと説いた。

井田讓の書簡によれば、後藤は一月二十一日、ベルリンに赴いた。『時事新報』は、その後、後藤がさらにウイーンへ行き、伊藤博文、上野景範、スタインの四人で約二週間、日本公使館で毎夜遅くまで何ごとか会議を開いたと報じている。後藤がベルリンに長期滞在したことは、栗原亮一が「後藤象二郎氏には一月中旬より伯耳林に赴かれ居る事なるが、多分三月上旬には再び巴里に帰らるべき都合なり」と自由新聞社へ報告しているので間違いない。



ユーゴーと会見する板垣退助
 (『土陽新聞』明治18年7月11日)

しかし、板垣はドイツへは行かなかった。二人は船中で意見が対立して関係がこじれ、パリ到着後はほとんど別のホテルに宿泊。今村和郎は後藤のみに随従して、板垣のためには通訳の助けもしたことがないという状態だった。

一八八三年四月二四日、板垣はロンドンに赴いた。この時は、ベルリンから戻っていた後藤も一緒だったと思われる。

明治前期、イギリスの思想家ハーバード・スペンサーの著作は日本で数多く出版され、自由民権運動に絶大な影響を与えた。とりわけ一八八一(明治一四)年出版の松島剛訳『社会平権論』(原題『Social Statics』)は爆発的に売れ、当時、板垣はこれを「民権の教科書」とまで絶賛した。

五月初め、板垣は心酔するスペンサーと話し合うことができた。ところが板垣の空論にスペンサーの堪忍袋が破れ、談半ばにして「no, no, no」の声と共に立ち上がり、それで相別れたと、駐英公使・森有礼が伊藤博文に書き送っている。

果して板垣とスペンサーの会談は、森がいうほど深刻な結果に終わったのだろうか。二人の関係は、決してスペンサーの「honono」で決裂したわけではなかった。この日、板垣は日本から持参したスペンサー著作の日本語版を直接本人に贈呈している。そして、帰国後にはさら

にスペイン著者の翻訳本を送ることを約束して別れた。律儀な板垣は、帰国直後、約束通り何冊かの本をロンドン公使館へ郵送した。館員がこれをお届けると、歓喜したスペイン人は返礼として「プリンシプルス、オフ、ソシオロシー」と題する新著を板垣に贈り、今後とも長く通信をしたいという板垣の意向に、自分もそのように希望すると答えている。

大量の書籍を持ち帰る

七ヶ月の外遊を終えて板垣と後藤が横浜に着港したのは、一八八三(明治一六)年六月二二日だった。帰国に際し、板垣は大量の書籍を持ち帰った。その中から一部はただちに翻訳されて日本に紹介された。

書籍は、随行の栗原に持たせたものと、船便の都合で遅れて到着したものがあつた。おそらく、これらの書籍を運ぶため、あらかじめパリで購入したのがルイ・ヴィトンのトランクなので、板垣らの往路の荷物は、「行李」に詰めていた。パリで初めて目にした頑丈で大きく気密性の高いルイ・ヴィトンのトランクは、貴重な洋書を持ち帰るのに恰好のものであった。

後続便が到着しないので、とりあえず栗原に持たせた書籍の中から、宮崎夢柳によって最初に自由新聞に記載されたのが『倫敦塔記』

である。これはウイリアム・エンズワースの『ロンドン塔』第一編第一章をかなり自在に意識したものの。

次いで夢柳は、イギリスの作家エドワード・キングの小説『ゼントル・サヴェーチ』を意識し、『憂き世の涕涙』と題して長期連載した。ロシア虚無党に加盟して社会大改造の理想に生きるアメリカ青年の恋と革命を描いた政治小説で、連載終了後、日本出版会社(後述)から単行本として出された。当時の人々から熱狂的に歓迎され、柳田泉は「明治初期翻訳小説中の珍品の一つ」と評している。

さらに翌八四(明治一七)年七月から、坂崎紫瀾がユーゴーの『九十三年』を『仏国革命修羅の衝』と題して連載した。

また、英国下院の議場内を写した写真も、「英国下議院会議之図」と題して石版で売りに出されている。

これとは別に、洋行土産の翻訳出版に意欲をみせたのが中江兆民だった。

一八八三(明治一六)年六月、兆民は政書出版会社と東洋著訳出版社を合併して日本出版会社を興して社長になっていた。目的は、年少有為の壯士養成、翻訳作業に従事させることによる窮乏志士の救護、真理民権を東洋に弘布定立させることにあった。

兆民は会社設立の賛同者を募って、四国、九

州、近畿を廻り、奈良の山林王・土倉庄三郎から五千円もの資金援助を受けた。帰国後にこれを知った板垣は懸念し、「土倉のような正直者から五千円もの金を出させるとは実に中江も無頓着者だ。出版会社が失敗すれば、俺の名前まで汚す。社長に田中耕造でも据えればまだしも、中江ではどうにも安心できぬ」と洩らしたという。板垣の言を兆民が伝え聞き、「もはや板垣とは絶交する」とまで言っているという政府密偵の文書が残っている。

ただし、両者のいさかきを針小棒大に報告した密偵情報は信用し難い。その後も二人の關係に特別な変化はなく、板垣が持ち帰った洋書は日本出版会社が翻訳出版しているからである。

自由新聞が「板垣総理の欧洲より提携して帰られたる英仏独の書無慮数千巻は、今度愈々日本出版会社へ引受られ、同社より追々出版せらる、筈にて、来る九月には大英今代史(十二卷)之第一巻を訳述せらる、よし」と伝え、さらに「日本出版会社の政理叢談は、今度大に其体裁を改めて差絵等を加へ、且つ板垣総理が欧洲より携帶し帰られたる仏國の碩儒ウキトル・ユゴー氏の伝及び龍動塔話等を面白く書き綴りて記載せられたれば一層善良なる雑誌となれり」などと報道しているのがその証拠だ。

一八八四(明治十七年)、小笠原書房という所から出版された中江篤介校・酒井雄三郎・白石時康共訳の『エミール・アコラス著』『政理新論』も、板垣携帯本の一冊である。

さて、現在、国立国会図書館に残っている日本出版会社刊行の『大英今代史』は、一八八五(明治一八年)二月出版の第二巻までである。一八三七年のヴィクトリア女王即位から一八八一年までの英国史を編述したこの一二巻本は、第二巻まで出してあとは出なかったらしい。板垣が心配したように、結局、兆民の日本出版会社は三年ほどしか続かなかつたのである。

※ ※ ※ ※ ※

今回の「ルイ・ヴィトン展」で、板垣退助のトランクを一九万人の人が直接目にし、あらためて板垣退助の名を脳裡に刻み込んだことの意味は、途方もなく大きい。板垣の名は、今後、世界最高のブランド名と共に語られることになるだろう。また、このトランクには、板垣退助が一九世紀のフランス、イギリスの偉大な思想家、政治家、文豪と交流した歴史も刻み込まれている。洋行の是非はともかくとして、土佐の自由民権運動と世界をむすぶ新たな視点を提起してくれていることは確かである。

板垣退助伯薨去五十年墓前祭のこと



板垣退助 玄孫 高岡功太郎

板垣退助は大正八年(一九一九)七月十六日に薨じた。退助は襲爵拝辞の旨を遺言し、

嫡男・板垣銚太郎は、この遺志全うすべく廢嫡して爵位を返上した。板垣家の家督は、銚太郎の長男・武生が夭逝していたため次男・守正が継いだ。仏式では、退助の薨去の翌年の命日を一周忌、その翌年を三回忌と数えるため、昭和四十三年(一九六八)は、退助の「五十回忌」に相当する年であった。また、この年は「明治百年」でもあったため、明治維新の元勳の偉業を顕彰し、これを永く後世に伝えようとする機運が世間にも高まっていたのである。

現在、東京・品川神社の裏手(旧高源院塋域)にある板垣退助の東京の墓所に、当時の自由民主党総裁・佐藤栄作の揮毫による「板垣死すとも自由は死せず」と刻まれた石碑が建立されたのは、まさにこの年に挙行された「板垣退助伯薨去五十年墓前祭」の時のことである。

板垣退助先生顕彰会の設立

まもなく板垣伯薨去百年・明治百五十年を迎えるにあたり、およそ五十年前に、どのような人々が集まりどのように板垣退助を顕彰する式典が催されたのかを、わが家に残されたこの「墓前祭」の時の写真や、幼少の頃より祖父母から聞いた話などを交えて当時のことをお伝えしようと思う。尤もこの式典が挙行されたのは、私の母・眞理子が、神戸の甲南女子大学英文科の四回生在学中。のちに私の父となる高岡功に母が見初められる以前の娘時代。私の生まれる五年も前のことであるので、以下は専ら私が母から聞いた話や、この時に参列者に配られた、板垣退助先生顕彰会の編纂による『板垣退助先生略伝(明治百年・先五十年祭記念)』と表題のある資料に基づいて同顕彰会の発足の経緯を略述すると、昭和四十三年(一九六八)七月十六日の板垣伯の五十回忌の命日を終えた四日後にあたる、



東京・品川の板垣家墓地で行われた50年墓前祭
(昭和43年)

同七月二十日、東京都千代田区霞ヶ関三丁目三番三号に所在する高知県東京事務所において、この会は発足した。同会資料は公刊されたものではないため貴重であると思ひ本文に記された『板垣退助先生顕彰会設立趣意書』の内容をしばし引用すると「板垣退助先生逝いて五十年、御遺族並びに御親戚一同は、相寄り故人をしのぶ五十年祭を営む趣きとなりました。時あたかも明治百年を迎え、今日の民主国家の成長と日本経済の世界的繁栄の姿をみる時、地下の先生はさぞ会心の笑みをたたえておられることと拝察されます。先生は（中略）王政復古の中核となつて活躍され、みごと維新の大業を完遂された明治の元勳であ

り、また明治新政府の発足に際しては、参議として台閣に列し（中略）立派な功績を残されました。不幸にして征韓論に敗れるや、西郷南洲翁と共に野に下り、間もなく佐賀の乱、西南の役起るに当り、先生は心中深く期する処あり、これに組せず、独り、眼を欧米先進国の経済の趨勢に注ぎ、日本の今後進むべき途を洞察しつつその間静かに想を練り、明治十三年（一八八〇）民撰議院開設の建白書を提出するに至りました。政府もようやくこれに動かされ、伊藤博文公を憲法研究のため欧州に派遣する等のことあり、ついに明治二十二年（一八八九）二月十一日憲法発布を見るに至りました。これより先、先生は同志と共に愛国公党を組織し、民権拡張のため全国を遊説し、さらに続いて広く同志を糾合して自由党を結成し、自らその党首となり、進んで陣頭に立ち、全国津々浦々を遊説して席温まる暇なく、議会政治の確立と民主主義思想の育成に努力され…（以下略）」と書かれている。

伯の結成した日本初の政治政党「自由党」が現在の「自由民主党」の起源にあたるという主旨から、時の佐藤栄作首相を名誉総裁、名誉副総裁に福田赳夫議員、名誉会長には溝淵増巳高知県知事を戴き、会長は第二次岸内閣で郵政大臣を務めまた高知板垣会の会長でもあった寺尾豊議員、顧問としては、旧

土佐藩・山内家御当主の山内豊秋さまや、伯が好角家であったことから日本相撲協会の時津風定次理事長、更に伯の銅像の建立されし縁から、平野三郎岐阜県知事、松尾吾作岐阜市長、石川要三青梅市長、佐々木耕作日光市長や、杉本重蔵品川区長、前野直定四国銀行頭取、福田義郎高知新聞社長ら多士濟々が集つてこの顕彰会は発足したのである。前記資料には、この時、記念碑の建立のみならず、品川神社裏手の板垣家墓所一六四平方米（約四十四坪）の周辺の土地一九九平方米（約六十坪）を買い受け墓域修築と造園を行ったことも記されている。建碑工事ならびに墓所の整備は着々と進み、顕彰会は、同年十一月に伯の事蹟と幕末勤皇の志士・中岡慎太郎や西郷隆盛らとの交友をまとめた書簡資料、今回の顕彰事業の概略を記した冊子を編纂した。かくして、同年十二月八日に、記念碑の落成を期して伯の五十年祭が挙行されたのである。

母・真理子の上京

この「墓前祭」の数日前から準備万端整えるために、私の母・真理子は、四年前に開通したばかりの東海道新幹線に乗って、父母に連れられ大阪宅から上京した。「墓前祭」は、五十回忌の式典ではあるが、伯の薨せられてより

五十年の月日が流れ、日本に自由民権の思想が根付き、縁ある方々をお招きし、我々子孫らが一堂に会することが出来る慶賀の日であるので「喪服」ではなく「晴着」の式典としてお越し下さいと事前に告げられていたので、私の母は振袖、祖父は正礼装のモーニングを着ての出席であった。私の祖父・乾一郎は、板垣退助の孫・守正氏から家督を継がれた弟の板垣正貫氏と従兄弟として、私の祖母・富美子は止貫氏の奥様・板垣晶子さまと親交が深く、東京滞在中も色々とお世話になったそうである。

世間では五十回忌の法要を「弔いあげ」と称して、以後先祖代々の御霊に合祀し永代供養とされることが多い。あるいは宗派によっては三十三回忌で「弔いあげ」とされることもある。伯は五十回忌まで仏式の法要で執り行われたが、これを一つの区切りとして改めて、伯を「自由民権の神」として幾久しくお奉りしようとの意見があり、この「墓前祭」では、神主さまをお招きして「掛巻茂畏岐…」と祝詞を奏上、玉串を奉奠して恭しく神式で挙行された。

祖父・乾一郎と小山鞆絵・良子夫妻

祖父の話によれば、退助は幼少の頃よりすこぶる腕白。また迷信を好まず現実主義者

で、少年時代、潮江天満宮のお守りを廁に捨ててみて、本当に神罰が下るのかを試したことがあるそうである。その退助が薨去五十年を経て「神」となったのであるから不思議なものである。しかし、この逸話によって伯を無神論者と決め付けるの早計だろう。板垣退助の著書『神と人道』には伯の思想が詳述されていて、それによれば伯は人智を超越した存在としての「神」を否定している訳ではない。伯のそれはもつと哲学的であり所謂、宗教教理におけるような「神」ではなく、お守りを廁に捨てたぐらいで怒るような人間的な存在ではないのである。(※『神と人道』は著作権期間満了により国立国会図書館のデジタルアーカイブとしてウェブ上で閲覧できるので一読をお薦めしたい)また伯の生前の事を述べれば、明治十五年(一八八二)四月六日、伯が岐阜で遊説の途に刺客に襲われ「板垣死すとも自由は死せず」と大喝し、伯の声望は愈々高まり「自由の神」、「民権の神」、「自由大権現様」と巷間に持て囃されたそうであるが、この「墓前祭」を期してまさしく板垣伯は「民権自由を守護する神」としてお奉りされたのである。

この「墓前祭」は、伯の一大慶事であるとして我々子孫も来賓として招かれたのであるが、板垣家当主・退太郎氏は、当時、病氣療養中であつたので、令弟の板垣直磨氏がその大役

を務められた。令姉の秋山範子(旧姓板垣)さまは、昭和三十六年(一九六一)、岩浪光二郎翁の尽力によって東京の青梅市に板垣退助伯の銅像が建立されたときに序幕をされた方である。また当時、伯の子供の世代として唯一ご健在であつた伯の五女の小山良子さまも遙々お越しになられ「家では、小山家と板垣家と乾家のことを今もいつもお祀りしております」と祖父と連枝の再会をとてお慶びになられた。「墓前祭」のあとの直会の席では、小山良子さまのご主人・小山鞆絵教授によって板垣伯の顕彰講話が催された。小山教授はドイツの哲学者・フリードリヒ・ヘーゲルの研究が専門で、講話のあとの歓談の折にヘーゲル哲学の話となつた時、私の祖父・乾一郎は学生時代に神学やイマヌエル・カントの『実践理性批判』哲学を学び牧師の資格を得ていたので、カントからヘーゲルへと続くドイツ古典主義哲学を比較し私見を述べたところ、小山教授は大いに驚かれ喜ばれ、祖父とすっかり意気投合されたとのことである。この式典に列席した伯の血縁者は写真のとおりであるが、それ以外にも伯の四女・千代子さまの婚家・浅野家から贈られた花輪が写真に残されているので、浅野家の方々もお越しになられたのかもしれない。余談ではあるが、この式典の二日後、板垣家の皆様に都内を案内して頂きながら車で東京見物

をしていた折、何かの重大な事件があったよう
で警察の厳重な検問があり、車を止められた
のだが、これが、かの昭和を揺るがす未解決事
件の「三億円事件」であったそうである。

※ ※ ※ ※ ※

「板垣退助先生顕彰会」は、その後、東京の
「板垣会」となったがやがて解散し、伯を顕彰
する中央での活動は衰微したが、高知では「財
団法人板垣会」が「NPO 法人板垣会」へと名
を変えて存続し、伯の生家跡に建つ「高野寺」
では、毎年欠かさず法要が営まれ、岐阜では
伯の遭難の故地で顕彰祭が現在も行われてい
る。そして、伯の事蹟を研究しようとする人々
が各地で活動をされていることは深く頭が下
がる思いである。

さて、来る平成三十年(二〇一八)は、板垣
伯の百回忌、翌年は薨去百周年を迎える。そ
の年は「明治百五十年」にも該当する。退助の
生きた幕末・明治の時代と、今、我々が生きて
いる時代を比較して如何であろうか。東アジ
アの情勢は、いまだ混沌としており、幕末明治
の先訓に学ぶべきことは多いのではないだろう
か。板垣をはじめそれを取り巻く人々の事蹟
を顕彰し、彼等の遺志を継いで、世界の平和と
安定に寄与できる成熟した日本となることを
切に願うばかりである。

(資料紹介)

無形伯旧夢談

田岡 髪山

我土佐書翰史を編し、清岡半四郎(故公張

子)の島村祐四郎氏に与へし、無形伯の脱藩の
得策たるべきを勧説せし書翰の真蹟を得ず、
当時土佐藩内の佐幕派が討幕派を排擠する
状の猛烈なるを想見し我は更に其形勢の委
曲を知るの要あり。幸に書中の主人公たる伯
が、南下して此地に淹留せらるゝを好機とし、
親しく警咳に接して其示教を受けんと欲し、
宇田滄溟氏を介して此意を致せば、伯は欣然
として之を領せらる。

三月四日、六花續粉として下り春寒料峭
肌に徹す。老伯此日門を出づるに懈し、又賓
客の到る稀なり。伯は乃ち此南下以来の清閑
日を利し、四十三年前の旧夢を喚起して、我
に向つて当時の事を説かるべく、人を我僑居に
遣つて我を其旅寓に招く。時に我事を以て外
に在り、其厚意に背きしは遺憾なりとす。是
に於て伯は更に此月六日を以て我と会見する
事となし、門下生は書を馳せて旨を我に伝へ
来る。

後藤との対立

六日、我は予期の刻を趨ふて、伯を唐人町の
旅寓に訪ふ。伯我を其室に延き、我携へたる清
岡の書面を熟読し、談は直に其書面に関連せ
る自家当年の境遇に入り横説堅説娓娓とし
て尽きず。此日の対晤我は実に其重大の史実
を解釈し得たるのみならず、維新史癖の痼疾
を有せる我の心情は、限りなき感興を勃発し
たり。茲に謹みて伯の賜を謝す。乃ち伯の談
話の要を録して、土佐書翰史の清岡の島村に
与へし書、及中岡の西郷に贈りし書の補注と
なすこと爾し。

寒暄叙終ると、我は直に清岡の書面を伯の
前に提供した。伯は之を手に執り上げ、読み
て文中

後藤参政方も御国情承り候得ば、今度
は事により大事之人を傷め候儀も難斗
と余程心配之様子に相見へ申候

の処に至ると、伯は暫く読む目を転し我に向



後藤象二郎

ひ、眉を揺かしつ微笑を湛へて謂った。後藤が心配の様子と言つてあるが、事実如何しい。當時一番後藤の目の上の瘤であったは私であつたと思ふ。後藤は或は私をやる考であつたかも知れぬ。心配など云ふことは表面上の言でないか。筆者曰く、私をやる考とは私を殺す考との義である。伯は更に語を継ぎ、

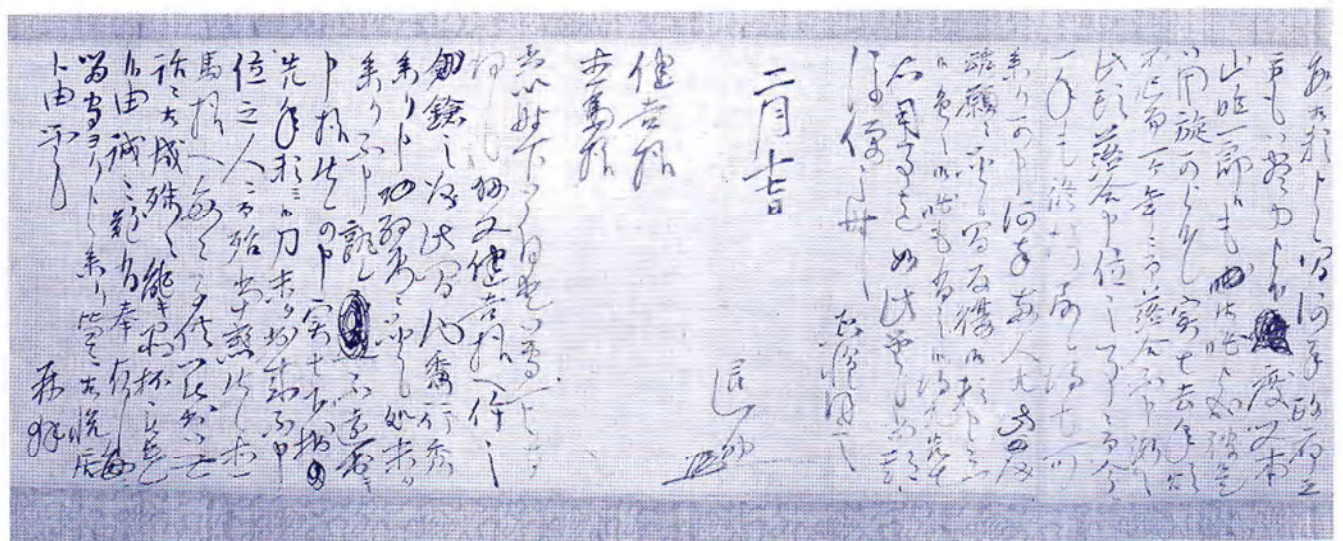
私も一時は後藤をやる考であつた。戊辰戦争終りし後、私は薩長は或は第二の尊氏たるかも知れない。此時こそ国家の擁護は我土佐を除いて他にないと信じ、藩の兵制を改革せんとしたが、俗吏が会計の局に当り、仲々手が着けられない。そこで私は思ふた。今は後藤を生かして置き、之を利用する時機である。と。上京して後藤に面会し僕は兼て君をやる考を抱いて居たが、今となつては何の恩讐もない。釈然とした者である。実は僕は個様々々の考があるが、会計の仕事と来ては我輩の短所

である。一つ君を累す。藩の要路に立つて貰いたいと謂つた。後藤は僕の方よりこそ挨拶すべき筈であつた。君の言に接して面目ない。君の相談は僕之を了承したと。是より後藤は土佐に還つて藩治に当り、かの鯨札などばつぱつと発行した。此事は薩長が夫の版籍奉還の議を建て後藤へ話す。後藤が私に相談に来る。私はそれは一儀に及はず、賛成して宜いと答へた時の前後であつたかと思ふ。

言ひ終つて伯は書翰の全部を讀過した。是より始めて当時の状態の説明に移つた。

吉井友実の来訪

私は此書翰を見るは今日が始めてである。島村が清岡の意を伝えて来た際には、此手紙を持参せざつたかの様に思ふ。面白い手紙を見当られた。簡単に事の顛末をお話しやう。私は薩藩の吉井(故幸輔伯)とは予てより交際があつた。月日は今直ぐ思ひ出さぬが、私が江戸に滞留中、一日吉井が遣つて来て曰ふのに、僕は先達でも江戸に来たが君の居る事を知らぬ故に訪問しなかつた。そこで私は僕は君の来た事を知つて居たと謂ふと、吉井はそりや君は怪しからんではないか。僕が来た事を知つて居るに、何故訪問して呉れなんだと私を咎める。私は君と相見る面目を有せぬから、それ故遠



乾退助が江戸から土佐の片岡健吉・宍戸直馬に宛てた書翰(慶応2年2月17日。板垣会所蔵)

慮して居たと答へた。吉井は其理由を尋ねる。因りて私は土佐藩庁が佐幕に傾いて、此時勢に処し取る所なき状を陳べた。吉井謂ふ尊藩の事情は兎も角、志士が国に尽すに其辺の事に頓着する要はないではないか。是非一日君と密会し大に談じて見やうと。乃ち其会期を約して其日は別れた。

私は前日の約を踐んで其期日に吉井を田町の薩藩屋敷に訪ふた。其会合の際私の按出し吉井に語つた一策は、従来の経験によるに京師は到底事を謀るの地でない。京師にて事を謀れば因循齟齬何れも皆失敗に終るでないか。今日の計を立てるには、各藩は其国許にて方針策略を確定して、然る後京師に打つて出づるが得策である。乃ち尊藩の三郎公が弊藩に枉駕せられて、容堂公に協議せらるゝとか、或は又志士が互に往来訪問して、大計を定むるとかの手段に出でなくてはならぬと謂ふ意であつた。吉井は固より之に賛成した。

後日、西郷、吉井が、三郎公の使者として我土佐に来た事は、私の策の實行せられた者であつて、私は江戸にて此消息を聞き、前途頗る望ある事と心中頗る愉快を感じた。

水戸浪士の隠匿

話頭少し混雑の嫌あるが、更に解説せねば

ならぬ事件は、是も私の滞江中、一日深編笠被つた一人の浪人が私を尋ねて来た。之を引見すると、其浪人は水戸藩士中村勇吉と名乗り、君の名を聞き身を托し大事を謀らんと思ひ立ち訪問したと言ふ。乃ち筑波山の残徒で武総野州に数多の同志を有し、幕府の狙ひ者となつて居る。此者が私の名を聞いたとは合点が行かぬが、兎に角身を托して来たは、所謂窮鳥懐に入るの類で見棄つる訳に行かぬ。浪人隠匿の爲めに罪科を得るならば其迄の事。寧ろ彼と死生を共にせんと決心し、乃ち中村始め其一味、相良総藏、里見某数人を我藩邸に潜匿せしめた。当時参勤交代の制は弛まつて、藩邸には多数の人は居ぬ。彼等を潜ましむるには屈竟であつた。

中村等は頻りに薩藩を悪し様に罵る。それは禁門の兵変長人を砲撃した故である。私は其れは君等の誤である。今日の時勢決して浮浪の手にて事を成し得べきでない。藩の全力を以て掛らねばならぬ。其処になると薩藩は見



板垣退助が光永眠雷に描かされた西郷隆盛肖像。板垣は最も似ていると自負していた。

込があるぞと説き聞かした。

當時在江の我藩士で、私の同志は山田平左衛門、真邊戒作、小笠原謙吉の年少者である。私は此等に向ひ僕は或は上京する時機到来するかも測られぬ。其後では中村等の浪人は君等に善く頼むと謂い置いた。又筑後の刀鍛冶で、我藩に抱へられて居る豊永久左衛門と云ふ者が江戸に居た。私は之と入懇にし、一寸義侠気があるらしく見受けたから、之にも山田等にも力を合す様頼み置いた。

薩土武力討幕の密盟

最初私の述べた各藩が国許にて大計を確定すると云ふ策が成立しなかつたのは残念である。西郷、吉井は土佐へ来た事は来たが、事が未だ熟するに至らぬ中に、又容堂公が上京せらるゝ、次第となつた。上京せらるゝと会藩杯の説が入る。我藩は全然の佐幕論で固められ、殆ど仕方が無い。薩藩は大に憤激して、大仏の我藩邸を焼打にする企ある杯の取沙汰もあつた。折柄在京の同志は私に出京を促して来る。私は藩状此の如くでは天下に対し面目なき事を思ひ、むしろ出京して君公を諫死して、自己一己の分なりとも尽さんと心に断じ、彼の中村等を山田、小笠原等に托し、急いで出京の途に上つた。

私が着京すると、平生心事を相許して居る石川清之助は私を尋ねて来た。谷干城、毛利恭助も尋ねて来た。相俱に藩状此の如くんば之を挽回するの策当に何くに出づべきかと断じたが、誰も名案は出ない。唯慷慨切齒するのみであった。然し私は自分一己の決心はある旨を述べた。決心とは夫の諫死の一条で、私は其程委曲の事は説明しなかつたが、或は辞氣顔色の上に何か目立つ事があったであらうか。其後石川が重ねて尋ねて来て、切りに私の意中を詰問する。私は包み匿すべき事でないから之を言明した。中岡は私の決心の次第を聞いて、それは不可ぬ。君一人が諫死したればとて、容堂公の心を動かすことは難い。犬死である。僕は固より君の死を争はぬ。只其精神にて他の然るべき方向に活動するが好いと謂つた。私も其理に服して諫死の事は思ひ止つた。然らば僕は西郷に面会して、我藩論が正に帰せずとせば、僕は国に還りて同志を糾合し、討幕の義拳に一臂を添ゆる事と致し度い。京師の一報により直に藩を脱走すべく三十日以内に果して此然諾を踐まなかつたならば、屠腹して食言の罪を謝するとの意を表せんと謂ふと、石川は手を拍つて是は妙計である。君の志此の如く壮ならば、僕は京に在りて弾薬火器の供給をなさんと謂つた。

其結果西郷等との会見となつた。私は一夕、

谷、毛利と相共に西郷に小松帯刀の旅寓に会した。乃ち西郷に談ずるに叙上の言を以てした。石川は私の話に継ぎ、僕は薩摩屋敷に人質となり、万一乾が其言を食まば僕も亦屠腹して死せんと謂つた。西郷は私等の言を聞き取り、是は近頃無き愉快な言説に接した。一儀に及ばず拙者は賛成すると快諾した。それから私は彼の浪人中村勇吉等の身に言及し、江戸にて年少同志に托したれば、大事を計画するにも何分後顧の患がある。此輩は今後尊藩邸に引取つて世話を頼みたいと相談したが、是も亦西郷が引受け呉れた。此浪士が薩摩屋敷引移りの事が近因となつて端なくも伏見鳥羽戦争を惹起し、討幕の結果を来したは、奇体でないか。後奥羽戦争終り私は東京にて西郷に面会した。其席には三条公もお居合せで、其他の諸人も居た。平素沈黙の西郷は私を見ると忽ち口を開いた。板垣さんは恐しき人よ。浪人を薩摩屋敷へ昇ぎ込んで、屋敷の焼打ちに遭はした。私は直くに之に応じた。それはむごい事よ。浪人の統御者も如何しく思ふに。然し好き幕明きでないか。西郷は聞いて呵々笑ふた。

筆者曰く、中村等は薩邸に在りて四出乱暴を極めた。幕府其薩邸に潜匿し居るを知り、薩邸に賭合ふて其引渡を請求したが、薩邸は之に応じない。幕府大に怒り遂に兵を派して

薩邸を焼打した。伏見鳥羽の激変は時勢の然らしむるとは云へ、此薩幕の大衝突が殊に此氣運を促したもので、伯の好き幕明とは之を謂つた。

中村勇吉の剛胆



中岡慎太郎(石川清之助)

此中村と云ふ浪人は仲々豪膽の男であつた。上野の戦に薩軍に投じ奮闘した。敵の砲丸に右の肩を打切られ、纒かに皮のみでぶら／＼と懸つて居る。負傷すると西郷の傍に遣つて来た。西郷はおけがでしたかと声掛くれば、やられました、と応ず。病院へ護送の事を請ふた。西郷は其準備なきから暫らく俟たせ置いたが、中村は平気な様で俟つて居る。漸く戸板の擔架が出来、それに載せて病院へ送つた。医は一見最早回復の見込なきから間に合せの治療を施した。中村は最う是にて手術は了つたかと問ふ。医は本日は負傷者多き故、重傷君

の如きは仮治療を施し、本手術は他の日を択ぶと答ふると、中村は空腹なればとて食事を求め、六杯程の飯を何の造作もなくかき込んだ。是より三日を経て遂に斃れた。

始め小笠原唯八は西郷の側に居て、負傷せる此中村の言語態度を見、其豪膽に一驚を喫し、西郷に何した人かと尋ねた。西郷は是は尊藩の板垣さんより頼まれた水戸浪士中村勇吉であると謂った。私は小笠原から此次第を聞き、後又西郷に会して模様を問質したが、西郷も是程の豪傑でないと思ふて居たが、実に案外であつたと膽を潰して居た。

軍制改革Ⅱ銃隊の編成

私は西郷等と誓つて土佐に還つたが、先づ今の名称ならば、陸軍總裁とでも云ふべき役に深尾丹波が命ぜられ、私は其副に挙用せられた。私は時至れりと軍制を改革した。若し私の功の誇るべき者ありとせば、此軍制改革が第一であらうと思ふ。私は今迄此事は誰にも言明せぬ。今日始めて口外するのである。それは銃隊を編制したことであつて、其迄土佐の軍隊には弓隊、槍隊杯あつて、始末が付かぬ。銃隊が編制せられざりしならば、この数ヶ月の後に起つた伏見鳥羽の戦に、我藩兵は何の役にも立たざりし道理でないか。そして私は右の

通り軍制を改革し、京師の沙汰次第にと藩論の如何に拘らず、此等の隊を提げて上国に奔り、西郷との約を踐む方針であつた。元よりは秘密である。

されど兵士の中には此秘密を明かしてある隊もあつた。それは日野小作の隊、第六小隊かの様に記憶する。此隊には劍客が沢山あつた。夫の石川の送つて来た本込銃百挺か百五十挺か、是は坂本の周旋で手附金ばかりで入手した様に思ふ。即ち此銃を携帯せる兵士へは秘密を明かしてあつた。其外暗々の中に取込んで置いた隊もあつた。

国許の志士としては、高知の島村祐四郎、西郡の桑原介馬、樋口真吉、桑原平八、東郡の池知退蔵、森新太郎等と相結んだ。島村杯は私が兵職に服事すると、それは面白い。しつかりお遣りを願ふと謂つて喜んだ。

連署組の構陷

夫の初め述べた刀鍛冶豊永久左衛門、是は幕府が薩摩屋敷の焼打後、自分も浪士中村等に関係した事の或は暴露して罪科を蒙るを恐れたであらう。腰を抜かして忽ち私の訴人と出掛けた。今此清岡の書面に拠ると江戸の役人が寺村へ送り参つたとある。私は此等順序は知らなかつた。

島村は一日私を尋ねて来て、清岡が来書の意を告げ、今夕直に用居口より脱藩ありたい。国境までは自分同志数名が護衛するとの厚意であつた。私は乃ち今一身の危難を慮り、大事を擲つて脱走する杯の事は男児の面目として西郷に対して談じて出来ぬ。生死唯事件の成行に任する。若し僕が事休せば以後の大策は大に君等の努力に俟たねばならぬ。宜しく頼むと答へた。

西野彦四郎と云ふ男、学問もあり思慮もあり通常の俗吏でない。此男も一日私に遣つて来て、涙を流して中村隠匿一件で君の身が危殆に瀕して居る。早く計を為すべしと注意し呉れた。西野へも私は断然此事件で死ぬとの君命ならば柿剥庖丁でも好い、自分は立派に腹を切つて見せると答へたが、段々思ひ運して見ると、私は一条の活路を見出した。それは江戸より京師に上りし節、石川の忠告にて諫死の事は思ひ止つたが、容堂公に拜謁の際非常の苦言を申上げたことがある。即ち君公が今の中大英断を下されずんば、臣は君公が馬を薩藩の軍門に繋がる、日の至らんことを恐ると上言した。之れへ私は猶附け加ふるに、臣は江戸に浪人数輩を隠匿して居る。今にして逐ひ払ふべきや。猶隠匿すべきや。此徒は必ず武総の野にて大事を決行すべき者、臣が之を隠匿せし所以は、有事の際彼等が君公の釣先を荒

すの恐れあればなりとの言を以てしたが、公は其俣にて苦しくないとの御意であった。乃ち浪人事件は最早秘密の性質を帯びて居らぬ。君公は御承知の事である。私は不^ふ凶^と之に気が付き西野に此事を語った。西野は後日之を公に申上げると、公はハタと膝を打ち、成程退助が左様申出でた事があつた。余は忘れて居た。退助と云ふ男は粗暴であるが、為す事一も私利の点はない。皆精神より出る。此度の事件決して咎めるに及ばぬと仰せられた。そこで私は命を拾ふた。清岡の手紙に閑連せる前後の事情を話せば、先づ此様な次第である。

私は一つ重要な事を言落して居た。当時土佐では佐幕党の勢力は大した者であつた。廓中の士で私と同主義で討幕論を執つた者は、僅に片岡健吉、山田平左衛門、真邊戒作等数輩であつて、其以外は悉く佐幕党である。私より見れば満城総て是れ敵手であつて、私は其間に孤立して討幕主義を抱持して居るから、佐幕派の嫌悪憤怒を被つたは非常であつた。小八木五平、寺田総馬の一派、是は頑固党で、野中太内、大崎謙蔵の一派、是は吉田党である。此等の佐幕派が相結合して書面を藩政府に提出し、私を現職より押落せと迫る。所謂連署組とは此輩の事で、私の境遇地位は仲々危険であつた。

茲に可笑しき話は、一夕佐幕派が大挙して

私を襲ふとの流説があつた。固より訛伝であつたが、之を聞いた私始め同志は黙過する訳に行かぬ。因つて同志は某宅に集合して、之に対抗するの準備に掛つた。其夕如何なる故であつたか、小笠原謙吉が出て来ぬ。人を遣つて謙吉を喚^よんだが、私は後で考へた、謙吉は兄唯八に似た思切りの善い男である。此際激に失する行動あつては宜くないと。そこで旨を含ませ更に別府彦四郎を小笠原宅に差立てた。別府が其門前に至つた時、丁度謙吉が槍提げ満面の意気もて飛出づる際であつた。別府は折好しと之を押し止めた。元来此謙吉は武技の中槍が得意なので、後にて聞けば謙吉は最初の報に接すると兄唯八に問ふた。兄さん私の槍で武道を立てる覚悟であるが、今宵は最早之を用する時機であらうか。唯八は暫く考へたが、一声高く最^も善^{からう}と叫んだ。悍^{かん}馬^ばに鞭^を中^あてたから溜^もつたものでない。乃ち右の行動に出でた訳で、此消息を聞いた私等は興に入つて大笑した。

盟友・小笠原唯八

小笠原唯八、此男は実に豪膽で果斷家であつた。奥羽戦争で朝廷の昵^{じつ}近^{しん}者^や、即ち徴士杯の身分で戦死したのは、世良修蔵と此小笠原二人のみである。茲に面白き話柄は、小笠原は



牧野群馬(小笠原唯八)の墓・福島県会津若松市・融通寺西軍墓地

三条公の信任を蒙り、徳川將軍が江戸城明渡し後は江藤新平と江戸町奉行となつた。一日江藤を尋ね辭職の取持ちを頼んだ。江藤は不審に思い其訳を質すと、僕の友人の板垣は、王師を督して彈煙硝雨の中に馳驅して居る。此際俗吏抔務めて居るは本心に負くと云ふ。江藤は押返し人々各其境遇がある。境遇に應じて責を尽すが善いでないかと宥めると、小笠原はいや僕はまだ他に理由がある。それは此間女郎買に出掛けたが、町奉行の御入来とありて楼中大騒動、只へいと頭を下げるのみで一向^{あいて}対^て手^ならぬ。此れではいかぬと思ひつゝ、帰途金杉に至ると、今度は読売に出会ふた。其文句に僕の事を謂つてある。——町奉行改り——牧野群馬と、是だから俗吏は到底出来得る者でないかと陳べ立てた。とうとう江藤の取持で、町奉行は御免、奥羽の戦に従事した。談話が岐路に馳せたが、伏見鳥羽の戦争後、私は高松征討の命を蒙り、藩兵を率ひて出陣し

た。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

私の性分は妄進と謂はんより、寧ろ理想を定めて進む方である。私は不思議にも敵の出会ふを前知する事が出来る。孫子に微妙の智と謂つてある。……微妙哉至於無形。神哉神哉至於無声。……私は軍学は原伝平に受けたが、此原翁が微妙の智を解釈して小鳥を捕獲する者が、あの鳥は遠く開いておとすが好い。この鳥は近く迫つて取るが宜いと直覚する。而して少しも誤らない。是れ心に得べくして口に伝ふべからざる者で、微妙の智とは此謂であらうと言つた。私は高松に滞陣中、此俣では都合あしと軍の総督深尾丹波を殆ど恐嚇半分に言ひこなし、上京すべく、丸亀に出で其より大阪に上つた。京師より毛利恭助が、出兵に及ばぬとの君命を奉じ丸亀に來たが、私と行違ふた。私は大阪に着くと、直に平濁(牧方)を経て京師に急行した。又南貞吉が毛利と同様の君命を齎し大阪に來たのと行違ふた。仕合せの事であつて、同一地点にぐずくして居なば、とても中原風雲の会に出会ふ事は出来なんだでないか。

出兵に及ばぬとの議は、当時君公に随従して京師に在る小八木、寺田等の意見と思ふ。それに後藤も参加して居たと推測する。私は

後藤をやる考を起したが、西郷は之を聞き知り、人を以て私に謂つて來た言が面白い。後藤をやるなら今少し早かつたならば好い。此際は後れたでないか。あの通り働いて居るから其俣にしては何ふだ。西郷は勝れた豪傑であつた。今少し早かつたならば好いとは、仲々意味ある言である(終)

〔『土陽新聞』明治四三・三・一七(三二二)〕



マンガに描かれた晩年の板垣退助。
画は画家・岡本太郎の父、岡本一平

【解説】

明治四十三年二月九日、板垣退助は墓参と社会改良の旨義伝道の目的をもって四年ぶりに郷里の地を踏んだ。三月二十五日に帰京するまで東唐人町の横山邸に逗留し、社会改良会高知支部臨時会に出席した外、土佐女学校、上町校友会、第二中学校、後免町、潮江校友会、伊野町で社会改良に関する講演をおこなつた。この間、歡迎相撲大会、打毬の催し、茶話会などが開かれ、多忙を極めた。

「無形伯旧夢談」は、高知滞留中、史家・田岡髪山が横山邸を訪ねて板垣から聞き取つた維新回顧談である。江戸土佐藩邸への水戸浪士隱匿のこと、薩土武力討幕密盟の顛末、藩内保守派(連署組)の構陷と危機回避、旧土佐勤王党との提携、盟友・小笠原唯八(牧野群馬)の追憶など興味深い逸話が語られ、また「無形」と号した真意を窺わせる話もふくまれている。

板垣退助の帰郷はこれが最後で、大正八年七月十六日、八十三歳で没するまで再び高知に戻ることはなかつた。

(註・読みやすくするためルビ、句読点をほどこし、小見出しをつけた)

(公文 豪)

世形書

死 生 亦 大 矣

板垣退助の数少ない直筆「死生亦大矣」(小山家寄託・高知市立自由民権記念館)

❖ 板垣退助98回忌法要のご案内 ❖

板垣退助は、大正8(1919)年7月16日、83歳の生涯を終えました。板垣会は、毎年命日に、生誕地でもある高野寺で法要を行っています。今年も、例年通り、以下の日程で98回忌法要を執り行います。当日は、平服で結構ですので、多数の方がご列席下さいますようお願いいたします。

●と き 7月16日 午後3時から

●と ころ 高知市中島町 高野寺

終了後、高野寺で板垣会総会。のち、サンライズホテルで懇親会を開催します。(会費 4,000円)

- 2016年6月20日 発行
- 発行者 古谷 俊夫
- 発行所 高知市本町2-2-31
- 特定非営利活動法人 板垣会
- TEL (0887) 55-2860

板垣会々員募集

年会費 2,000円
板垣退助顕彰に御協力を!
入会は別途振込用紙をご利用ください。

会議・宴会・祝事・祭事・法要等にご利用いただける
多目的ホール・座敷 各種会場を完備

観光・ビジネス・スポーツ合宿等 目的に合わせてご宿泊可能



ひとときわ輝くおもてなし

高知 サンライズ”ホテル

www.kochi-sunrise.com

〒780-0870 高知市本町 2 丁目 2-31 Tel 088-822-1281



明治維新、自由民権運動の主導者としてがんこなまでに民主化を進めた板垣の意思をがんこまんじゅうにたくしました。



株式会社 小室原

高知市本町3丁目4-6
TEL 088-875-2430